

集合的ノスタルジアが外集団成員への態度に与える影響

2018M30002 邢 子潞

要旨

近年、ノスタルジアに関する研究が増えている。なかでも、ノスタルジアの影響や心理的な機能についての研究が数多くある。そして、ノスタルジアはさまざまなポジティブな機能を持っていると明らかになった。しかし、ノスタルジアはいくつかの形態の分類があり、いままでの研究は違う種類のノスタルジアの機能はどう違うのかという点についてはあまりふれていないため、その点については検討する余地があると考えられる。そこで本研究は2種のノスタルジア状態を喚起した場合に、ノスタルジアが内集団と外集団成員への態度に与える影響を調べた。

ノスタルジアは、最初は疾病として知られていたが、現在は誰でも持つ感情のひとつで、そして「ビタースイート」な感情として扱われている。先行研究より、ノスタルジアはソーシャルサポートの知覚を強める機能（Zhou, 2008）があり、その機能を用いて特殊な団体への態度を改善することができる。また、音楽によってノスタルジアを喚起させ、外集団に対する信頼度が上がるというような実験結果も得ていた（小林・大竹, 2018）。一方、人が集まると集団が生み出される。集団をめぐって集団間の葛藤が生じ、「外集団の存在を認識するだけで、集団間競争や差別的な反応を引き起こすのに十分だ」ということも示唆されてきた

（Tajfel, 1979）。また、集合的ノスタルジアについての研究によると、集合的ノスタルジアを喚起された時に、メンバーの内集団に対する評価はより肯定的になり、集団を支持する行動も強化されることが分かっている（Wildschut, 2014）。すなわち、内集団の凝集性が強くなると、外集団に対する態度は拒否的になる。そのみならず、単に外集団を意識するこ

とによって、否定的な態度が生じる可能性がある。そこで、違うノスタルジア状態を喚起した場合に、メンバーが内集団と外集団に対する態度がどう違うかが本研究の主題になる。そしてノスタルジア状態は、個人的ノスタルジアと仮想経験ノスタルジア2種類に分けて測定した。以下は仮説とする。

- ① 違う曲を聴取した後仮想経験ノスタルジアと個人的ノスタルジアがそれぞれ喚起される。
- ② 仮想経験ノスタルジアが喚起された場合、内集団に対する集団同一視程度が高くなり、外集団に対する信頼度が低くなる。
- ③ 個人的ノスタルジアが喚起された場合、外集団に対する信頼度がより高くなる。

本研究は、北九州市立大学の大学生および大学院生71名を対象に、ランダムに「仮想経験ノスタルジア群」（男性9名、女性24名）、「個人的ノスタルジア群」（男性6名、女性20名）、「統制群」（男性7名、女性20名）の3群に分けて実験と質問紙調査を行った。実験は年代別の音楽を聴かせた。これは、違う種類のノスタルジアを喚起させるためである。刺激材料は、仮想経験ノスタルジアを喚起できると予測される「上を向いて歩こう / 坂本九/1961」、個人的ノスタルジアを喚起できると予測される「空も飛べるはず / スピッツ/1994」、統制条件として使用した「Pray/ [ALEXANDROS] /2019」である。実施した質問紙は3種類の尺度で構成された。1つ目は実験参加者がノスタルジア状態になるかどうかを確認するため、Wildschut(2006)と長峯(2016)を参考に作ったノスタルジア状態尺度である。2つ目は唐沢(2001)による集団同一視尺度を用い、所属集団(ここは日本・日本人)に対する集団同一視程度を測定した。3つ目は外集団に対する態度の測定で、場面想定法で行なわれた。

場面想定法のシナリオは、“あなたは街中に歩いている途中、ある知らない外国人が慌ててあなたのもとに来て、知らない言葉で話しかけてきました。どうやらあなたの携帯を貸してもらいたいと言っているようです。”という状況を設定している。その後、「この人をどのくらい信頼することができますか？」「携帯を貸したいという気持ちがありますか？」という質問に7件法で回答してもらった。手続きとして、参加者は、まず、現在の気分としてノスタルジア状態尺度に回答した。次に、群に分けて違う曲をそれぞれを1分30秒程度の間聴取し、再度ノスタルジア状態尺度を回答した。その後、集団同一視尺度（唐沢，2001）と外集団に対する態度の測定を回答した。外集団に対する態度の測定の得点は「信頼感」の得点とした。

仮説を検討するため、群別（「仮想経験ノスタルジア群」「個人的ノスタルジア群」と「統制群」）で外集団成員に対する信頼感と集団同一視程度、個人的ノスタルジア得点・仮想経験ノスタルジア得点の相関係数を算出した。結果として、正の相関がみとめられたのは、「個人的ノスタルジア群」において、個人的ノスタルジア得点と信頼感であった（ $r = .80$ ， $p < .01$ ）。また、信頼感についての2つの質問も正の相関がみとめられた（ $r = .64$ ， $p < .01$ ）。弱い正の相関がみとめられたのは、「個人的ノスタルジア群」において、仮想経験ノスタルジア得点と信頼感であり（ $r = .55$ ， $p < .05$ ）、「仮想経験ノスタルジア群」において、仮想的ノスタルジア得点と集団同一視程度であった（ $r = .26$ ， $p < .10$ ）。また、弱い負の相関がみとめられたのは、「個人的ノスタルジア群」において、信頼感と集団同一視程度（ $r = -.28$ ， $p < .10$ ， $r = -.35$ ， $p < .10$ ）であった。その他に有意な相関関係がみられなかった。この結果から仮説②と③の一部が支持されたが、仮説①は支持さ

れなかった。

以上の結果より、本研究は、違う種類のノスタルジアの機能はどう違うのかという点について一定的な意義があるであろう。しかし本研究は刺激材料の選択方法や援助行動が生じる要因などの点について、十分に考えていないため、その点を今後の課題として引き続き検討すべきと考えられる。